

第6号

2016年
6月発行

CONTENTS

- 「日本語の歴史的典籍の国際共同研究
ネットワーク構築計画」の“More is
different”
核融合科学研究所 教授
(本計画 アドバイザー) ①
- 伊藤 公孝 ③
- 歴史的典籍の検索機能の高度化、
そしてスクリーン解析に向けて
国立情報学研究所 准教授
(研究開発系共同研究担当者)
- 北本 朝展 ④
- 表記の位相 「延寿撮要」を例に
国文学研究資料館 准教授 ⑤
- 入口 敦志 ⑥
- 古典オーロラハンター
「新しい市民参加型研究の可能性」
国立極地研究所 准教授
- 片岡 龍峰 ⑦
- 総合研究大学院大学 極域科学専攻
藤原 康徳 ⑧
- 今後の事業推進に期待すること
日本語歴史的典籍ネットワーク委員会
評価小委員会委員長
(日本電子出版協会顧問)
- 中山 正樹 ⑨
- コラム 夢応の料理
古典籍共同研究事業センター 副センター長
山本 和明 ⑩
- トピックス ⑪
- ⑫

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニユーズレター



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の“More is different”

「時代は変わる」から「時代を変える」へ

いつの代でも「時代は変わる」と言われるのですが、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が実現したことは、ひとり国文学研究の世界のみならず日本にとって時代を変える潮目になるものと期待します。

文部科学省にて「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想 ロードマップの策定」が行われ、文理全体の学問を俯瞰して、日本の大型学術研究が進められるようになっていきます。本計画は、平成二十六年度には大規模学術フロンティア促進事業に採択され本格稼働する事になりました。

学問は、育った後に姿を現すものであって、始めるときに提示出来るものではありません。学術研究は、多くの国家的な事業と比較すれば post-ponable なものかもしれませんが、尊いものです。計画の尊さ(価値や意義)を説得するにはどうすればいいか智慧を絞るところです。そこで、これまでいくつかの理工系の大型プロジェクト研究に携わってきた経験が活かせないかということ、縁あって本プロジェクトのアドバイザーとして支援をお引き受けしています。

“More is different”

私が専門に取り組んでいる物理学の考え方には、

核融合科学研究所 教授
(本計画 アドバイザー) 伊藤 公孝

いとう きみたか

“more is different”量は質を変える」という原則があります¹⁾。物理学の伝統的な旗印にはふたつありそのひとつは、古代ギリシア以来の「物質の究極の構成要素を解明する」という探求です。多種の物質を要素に分けて行くと分子と原子が観測され、原子は原子核と電子から構成され、さらに素粒子が観測され……という具合に次々に普遍的な要因へと肉薄していきます。その結果、「なぜ物質に重さがあるか」等の根本的な問題に理解が深まってきました。もう一方の旗印は、「万物が流転する様を理解する」事です。一つの電子を眺めていても、自然はなぜかくあるのか分かりません。集まって来る原子の数がだんだん増えて、ある量に達した時、私たちが知っている物事やその性質が現れる。物理学者はそこで物事の遷移が起きたと考へ、“more is different”(量による転換)と言いきかせます。その結果、「なぜ自然はかくあるのか」という根本的な問題に迫ってきました。

量による転換の原則が「日本語の歴史的典籍データベース」においても起

きるだろうというのが私の期待です。その姿が、総合書物理学の一特性を表すと思います。

今西館長が九州大学の文学部長をなさっていた頃、九大でお作りになって公開されていた画像文献データベースをウェブで拝見した事があります。画像は、先ず時絵の箱から始まり、手に取るように示され、悠揚迫らざるものがありました。そのような画像文献データベースから研究者・視聴者とともスタートしたのだと思います。日本語の歴史的典籍の(ほとんど)総てが画像文献データベース化されれば、いよいよ量が質を変えることでしょう。

既にそのような試みが始まっていると理解しています。昨年、第一回「日本語の歴史的典籍国際研究集会」を拝聴しました。そこで、古典籍の奥付けを全部見てしまおう、「何時どこで誰が何の本をどのように作ったか」を見渡そう、というお話を興味深く伺いました。三〇万点について「何時どこで誰が何の本をどのように作ったか」分かれば、それを日本地図の上に年代とともに表

記して行くと、日本人にとってそれがどのように展開発展受容されたか、どんな素人にも目に見えるように分かると思います。そして一つの流れが類似の別の潮流を生み出す様が見て取れるようになるでしょう。“more is different”の原則が次々に発揮され、新機軸を生み出す事を期待しています。

データベース化は、他の人文学の分野でも急速に進んでいると思います。この国文学研究資料館の古典籍画像データベースが、人文学の分野で新しい学問をつくる上の先駆的な例になって欲しいと思います。

文化の力

この事業の未来に何が開けるのでしょうか。

生命系の話ですがヒトゲノム計画が始まったときも雲を掴むような話でした。今やデータが完備し、どんな専門の人でも使えるようになり、基礎研究や産業も大きなインパクトを受けて、当初の意図やビジョンを超えて発展しています。

ある碩学が、国文学研究資料館の仕事に「千年かけても国文学の資料を読解する事」と仰っていました。もっともな事と思いい、その志は揺るがないものだと思います。そうした研究理念のもとでも大規模学術フロンティア促進事業が行われる事の意義は深いと思います。

この事業の未来について、国文学研究資料館の国文研ニュースに伊藤早苗運営委員が寄稿しており、「日本語の歴史の典籍とは日本人が考えて書き記した事の根幹であり、日本人が考えた事・考えた日本人、その双方を知り理解するにはこの道を通ることが欠かせない。」と喝破しています。⁽²⁾

日本人が考えて来た事(自分がどのように考えるのか)を知る事とは、実は本当にオリジナルなものを考え出す大元の力だと思ふのです。「文理融合」という旗頭のもと、この事業は広く支持され応援されています。文理融合ということばのもとで、私が強く望んで(夢見て)いる事は、この事業によって、日本の文化の力が文学・思想の専門家だけでなく多くの日本人に共有されるよ

うになる事です。他人より上手く考える事は大切です。しかし、世界最初の解法を考える事、問題の発見こそが文科理科にかかわらぬ学術フロンティアの本質だと思ひます。発見した問題と解決を普遍的な文明的な課題へと昇華させる訓練は、高等教育や自己研鑽で学んでいます。しかし、どうすれば問題を発見する能力が生まれるか。人とは違つた目でものを見る力はどうすれば生まれてくるのか。これらが焦点です。

ある有名な大学の哲学講座の説明では、その学生たちが未来の後輩たちに向かつて、その研究室で学ぶ事は「これ以上考えても仕方が無い」と普通なら思うところから考え始める事」と説明していました。当を得た説明と思ひます。自然科学でも本当の最先端では、何を考えるのか(自分でも)分からない、と思われる事を考えています。それが学術のフロンティアなのだと思ひます。

「人とは違つた目でものを見る」力を生み出すもの、それが文化の力ではないかと思ひます。ジョイスの「若き芸術

家の肖像」には、独創を目指し力を尽くして後は祈るのみという境地になる時、人を支えてくれるのは文化の力であることが書かれ、心を打たれました。日本語の歴史的典籍データベースを用ひ日本人が考えた事を知る道筋をたどり、自分がどのように考えるのかを知る事が、世界の大競争時代の中で問題を発見する力の源泉になるのではないかと期待するのです。

多種多様な魅力ある学問が百家争鳴の今日、本プロジェクトが学術のフロンティア事業に選ばれてある事はすばらしい事だと思ひます。「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が実用に供され、日本人が考えて来た事を知り自分がどのように考えるのか、日本の未来・世界の研究の将来を照らしてくれる事を期待します。

(1) P. W. Anderson: Science Vol.177, Issue 4047 (1972) 393

(2) 伊藤早苗:国文研ニュース41(2015)1

歴史的典籍の検索機能の高度化、 そしてスクリーン解析に向けて

国立情報学研究所 准教授
（研究開発系共同研究担当者）

北本 朝展きたもと あさのぶ

日本語歴史的典籍の大規模デジタル化が進めば、どんな世界が見えてくるだろうか。それをいち早く想像しつつ、いくつかのアイデアを実現していくのが、私のような情報学者が果たすべき使命であると考えている。現実の延長では物足りないが、現実離れた夢では意味がない。数年内に実現でき、かつインパクトの大きい研究とはどんなものか、それを日々考えている。

我々の共同研究テーマは「検索機能の高度化」である。歴史的典籍はどんな本であり、その中に何が書かれているかを調べるには、非文字情報を対象とした検索の高度化と、文字情報を対象とした検索の高度化という、二つのアプローチに取り組む必要がある。前者については最後に触れるとして、まずは後者について考えてみよう。

何が書かれているかを知るには、歴史的典籍をテキスト化するのが最良の方法である。そのよい例が米国のHathiTrustデジタル図書館で、欧米の書籍を中心に一四〇〇万冊、五〇億ページの書籍データの一部分が全文検索できる。またHathiTrustへの有力なデータ提供元であるGoogle社は、最近数百年間の書籍に出現する単語の頻度分布が調査できるGoogle Ngram Viewerというサービスを立ち上げている。同様の機能が日本でも実現できれば、日本文化の網羅的な解析に大きく貢献するであろう。

しかし、そこに立ちほだかるのが文字認識(OCR)である。HathiTrustで全文検索が実現できているのは、人間が翻刻したからではなく、OCRが大量の文字を自動認識できたからである。しかし日本のくずし字は欧米の活字体と比べてOCRがはるかに難しいため、その精度には限界がある(参考:寺沢憲吾、「文書画像の

認識と理解」、ふみ第四号)。かといって、人間がすべての歴史的典籍を全文翻刻するのは非現実的であり、タグ付け程度でさえ全冊の完了は困難な見通しとなっている。

ここで発想を転換してみよう。全部を読むのは大変だとしても、読めるところだけ読むことはできないだろうか。例えば古代文字の解読をするなら、まず読めるところから読み、断片的に得られた情報をつなげて隙間を埋めながら、解読できる範囲を広げていくだろう。同様に、人間の遺伝子を全解読するヒトゲノムプロジェクトでも、遺伝子の断片を読み、それを後でつなげる技術が、遺伝子の全体像(ゲノム)の解読に大きく貢献した。

ヒトゲノム全解読というアイデアは、世界中の研究者が協力しても一〇〇年かかる非現実的なプロジェクトとみなされていたが、一九八七年に日本の科学者が人手ではなく機械を用いて遺伝子を自動解読するというアイデアの提案が契機となって、様々な自動化技術の驚異的な進歩が始まった。そして提案からわずか十五年ほどの二〇〇三年頃にヒトゲノムの解読は完了し、病気のメカニズムや治療方法などに関するデータ駆動型の研究が大きく花開いたのである。

これと同様に、コンピュータが歴史的典籍を全解読することは可能だろうか。今のところは非現実的なアイデアに聞こえる。しかし、近年の機械学習の進歩、特にニューラルネットワークに基づく深層学習の急激な進歩を活用すれば、将来的には加速度的に解読性能が向上する可能性も否定できない。もしそんな技術が開発でき、歴史的典籍のかなりの部分が解読できれば、それは「書かれた」日本文化の網羅的な解析のための基礎データとなって、新しい

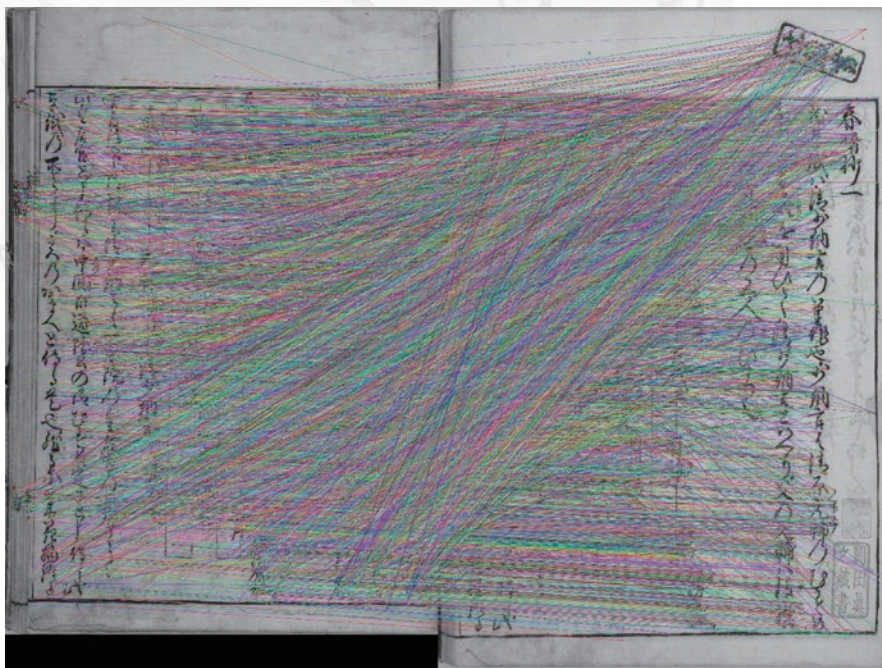


図1 2枚の画像から抽出した特徴点の対応付け

冊の画像を位置合わせして比較すること、二冊の違いを浮き上がらせる方法を研究した。図1に示すように二冊の画像を位置合わせし、図2に示すように赤・白・青のカラースケールで色が付けられるのが処理の流れである。二冊で文字

データ駆動型の研究が開くことになるだろう。このようなゲノム解読をお手本としたアプローチを具体化するため、同様に古典籍に「書かれたもの(スクリプト)」「の全体像を表現するコンセプトを「スクリプトーム(scriptome)」と呼ぶことを提唱したい。スクリプトーム解析は、ヒトゲノム解析にも匹敵するグラントチャレンジであり、この共同研究ではそんな壮大なテーマにも取り組んでいきたいと考えている。

さて、共同研究はまだ始まったばかりであるが、最初のテーマはコンピュータビジョンを用いた異版の研究である。具体的には、二

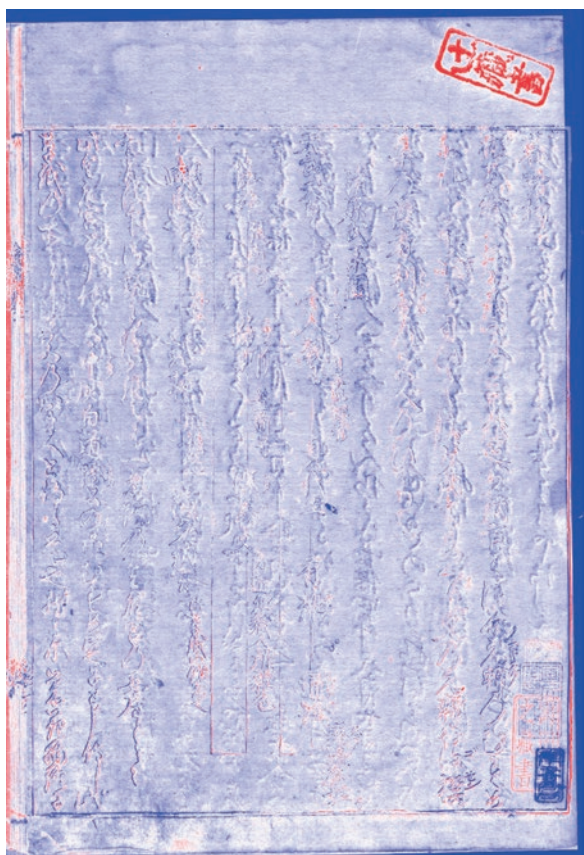


図2 2枚の画像を重ね合わせ、画素値の差に応じて赤／白／青のカラースケールで着色した結果

冊の画像を位置合わせして比較すること、二冊の違いを浮き上がらせる方法を研究した。図1に示すように二冊の画像を位置合わせし、図2に示すように赤・白・青のカラースケールで色が付けられるのが処理の流れである。二冊で文字

が重なる部分はキャンセルされて白色になるため、人間は赤と青の部分だけに注目すればよく、「間違い探し」が主観に影響されにくくなる。この方法は、版や刷などの書誌学的観点から「この本はどんなものか」を分析するものであり、文字を翻刻しなくても画像の直接比較を用いて分析できる点に長所がある。そして我々は、デジタル技術を用いてテキスト・クリティークを高度化する研究の枠組みを「デジタル・クリティーク」と名付け、様々な側面から研究を進めている。

スクリプトーム解析では、画像を比較する物理的レベルから内容を理解する意味的レベルまで、様々な階層に関する研究を重ねていくことになる。ただし、スクリプトーム解析の先には人工知能による歴史的典籍の自動的理解が待っているかといえ、それは今のところ夢想でしかないのでご安心(?)いただきたい。たとえヒトゲノム全解読ができて、病気の解明までの道は遠いものと同じく、スクリプトーム全解読ができて、内容の理解までの道は人間が頑張らなくてはならないのである。

表記の位相 — 『延寿撮要』を例に —

国文学研究資料館 准教授

入口 敦志

江戸時代以前の〈学問〉とはすべて漢文で行われるものであった。従って〈学問〉の対象であった医学に関する書物も漢文で書かれるのが一般であった。そのような状況の中で、ひらがな混じりの文章で書かれた『延寿撮要』(慶長四年(一五九九)刊、古活字版)という医書がある。著者は曲直瀬玄朔(一五四九—一六三二)、後陽成天皇にも重用された当時最高峰の医師である。その跋文(図1の左

頁)に執筆事情が書かれている。「常陸国(現在の茨城県)の民百姓たちが医学の知識もなく病に苦しんでいる。それを助けるために「倭字」をもって執筆した」というのがその大意。「倭字」とはひらがなのこと。図1の右頁が本文の最後の部分であるが、跋文に書かれているとおり、漢字とひらがなで書かれている。最後の項目は、

○懐妊の間は辛辣^②の物を食せず、恚怒^③の心を生せず、常に善言を聞、善事を見、善事を行ふべし、かくのごとくなれば、子生てかならず福寿忠孝也。

とある。胎教を教えるもので、今でも通用しそうな内容である。

この書物は好評であったらしく、江戸時代をとおして何度も刊行されるが、そのひとつに『延寿養生』(寛政十二年(一八〇〇)刊)という版本がある(図2)。題名は変わっているが、内容は『延寿撮要』と同じもの。おそらく「撮要」(要点の抜き書き)という意味)などというわかりにくい文字を、「養生」というわかりやすいことばに置き換えたものと思われる。本文も漢字を少なくし、漢字に読み仮名を振るなど、更に読みやすくするための工夫が凝らされている。

このように、江戸時代以前は、文字種とそれを使う身分的位相は

直結していた。慶長版の『延寿撮要』のように、楷書の漢字とひらがなを組み合わせさせて使うことは我々にとってはなじみ深いのだが、当時の表記としてはかなり特異なことでもあった。ひらがなと漢字を同時に使う場合には、『延寿養生』のように、漢字も楷書ではなく行書や草書で表記することが一般であったからである。

そもそも『延寿撮要』における、「辛辣」「恚怒」などの漢語が、ひらがなしか読めない民百姓たちに読めて、意味がとれたかどうかについては大いに疑問がある。いや、その時代の民がひらがなをどれほど読めたかさえ怪しい。玄朔の意図は良いのだが、『延寿撮要』がどれほど役に立ったかはわからない。だからこそ、『延寿養生』のように更に和らげたものが出版されたのだろう。これならば、江戸時代中期以降であれば、かなりの人々が読めたと考えられる。

しかし、現代の我々から見ると、やさしいはずの『延寿養生』の方が読みにくく、難しいはずの『延寿撮要』の方が読みやすいのは皮肉である。明治以降近代教育によって、日本国民が高い教育水準に達したことはこのことでもよく分かる。一方で、ひらがなを読み書きしてきた前近代の民衆とは随分乖離してしまった。そのことが、このような画像を見ることによってよく分かるのである。

(1) 跋文：本文とは別に書物の終わりに記す文章

(2) 辛辣の物：味の辛い食べ物

(3) 恚怒：激しい怒り

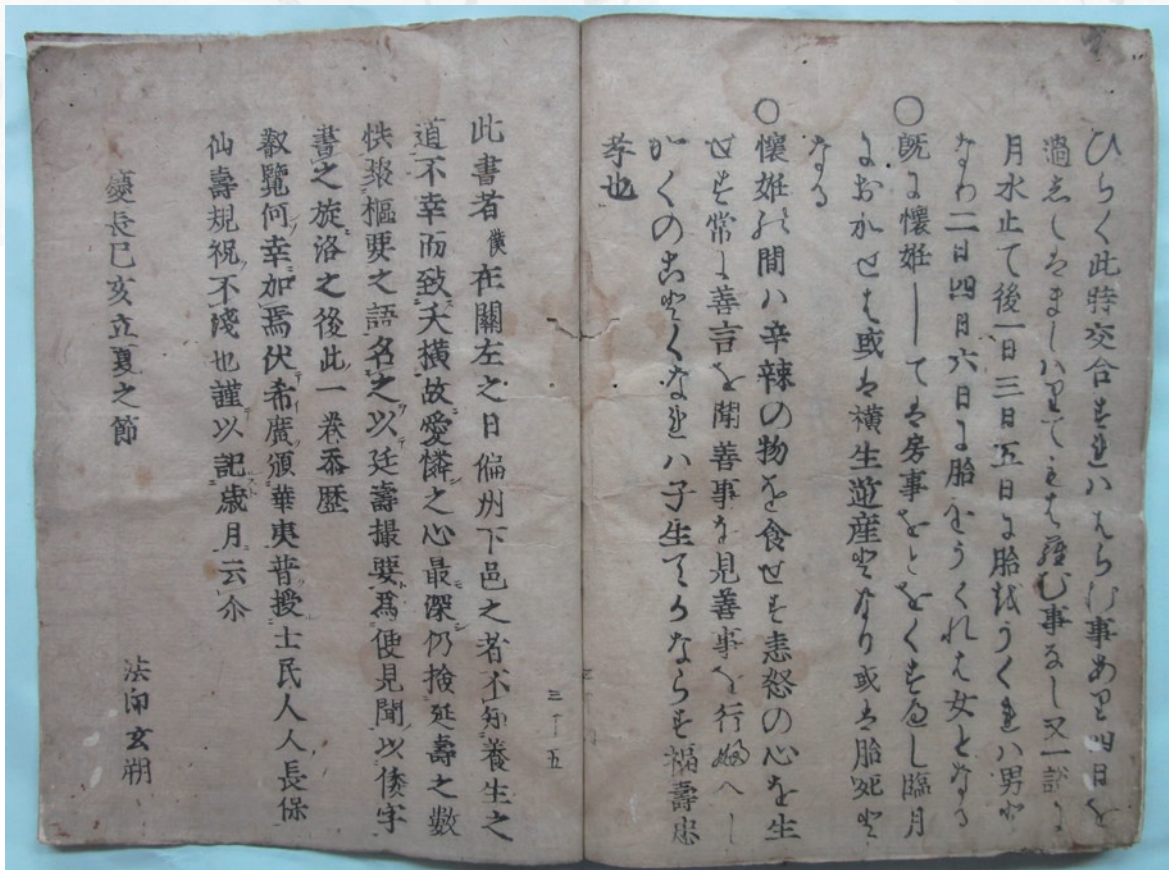


図1 『延寿撮要』(古活字版、野中家烏犀圓蔵)

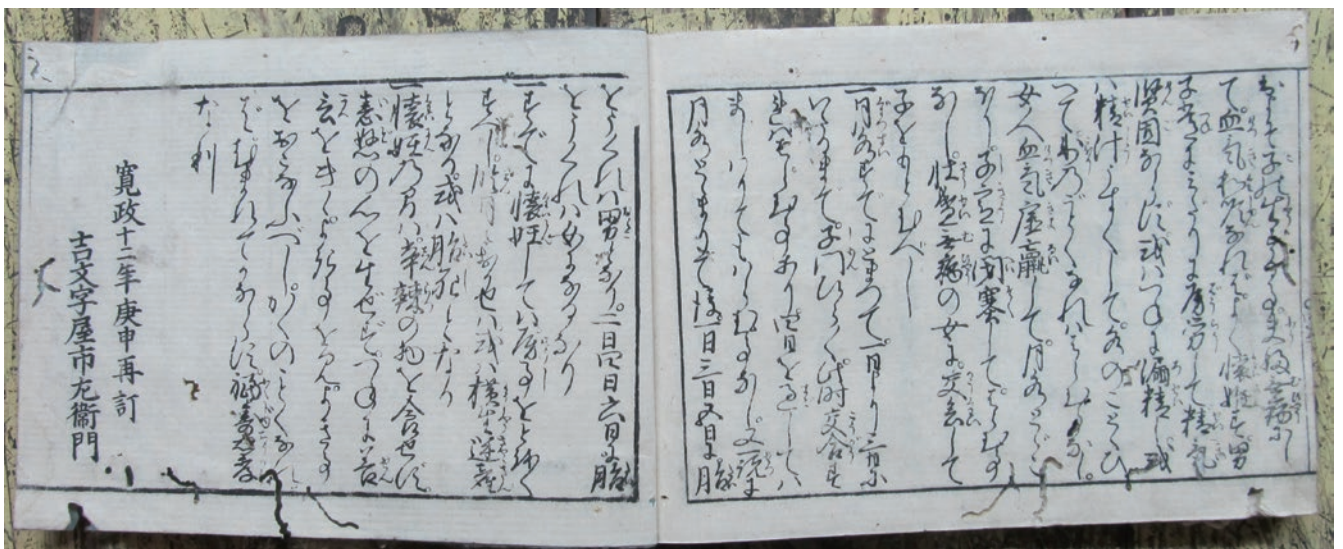


図2 『延寿養生』(整版本、野中家烏犀圓蔵)

古典オーロラハンター

新しい市民参加型研究の可能性

オーロラが観られるのは、北極や南極に限りません。実際に、古典籍を紐解くと、日本の夜空にオーロラのような「赤気」が見えたと書いてあり、立派なオーロラの絵が描かれています。こういった、地球規模で緯度の低い地域にまで広がるオーロラというのは、数十年に一度あるかないか、という程度に珍しいものです。また、最大級のものとなると、数百年に一度しか起こらないため、手がかりが極めて限られています。

私たちは、「オーロラに思いをはせるのは研究者だけじゃない」をキャッチコピーに掲げ活動しています(オーロラ4Dプロジェクト <https://aurora4dj.jp/>)。古典籍に残る歴史的オーロラの記述や、SNSに投稿された現在のオーロラ写真などを分析し、極限環境でのオーロラとはどういったものなのか、地球規模でどこまでオーロラは広がり得るのか、どのような光り方があり得るのかを研究しています。しかも、本研究では、広く市民の方の参加と協力を呼びかけています。

この新しい研究の舞台が、国文学研究資料館です。この三月に国文研の寺島恒世副館長をはじめとする研究者の協力により、国文研が所蔵する古典籍などをオーロラや流星を研究する私たち極地研の研究者とオーロラファン・古典ファンが一緒になって読み込み、オーロラの記述を探してみる、というイベントを共同開催するに至りました。具体的には、国文研の方々に用意して頂いた様々な古典籍の活字本から「赤気」などの言葉を拾い出す、という作業で

国立極地研究所 准教授

総合研究大学院大学 極域科学専攻

片岡 龍峰

藤原 康徳

龍峰

す。およそ一時間、私たちスタッフも含め約50名が一丸となり、記述の内容や記載ページをカードに書き出す作業を進めました。漢字の海に浮かぶ「赤気」というリングを探し出すという、理系の私たちには一見無謀な挑戦の中に、新しい市民参加型研究の「未来」も感じました。今後の研究の可能性を広げるため、参加者には「赤気」だけではなく「彗星」など天体現象を幅広く見つけ出してもらいました。その結果、数十枚のカードが集まりましたので、その幾つかを紹介したいと思います。

◇『吾妻鏡』文治五年二月二十八日条

丑に及びて住吉小大夫昌泰参し申して云はく、今夜異星見る。彗星たるかと云々。二品すなわち御寝所より庭上に出御、これを覽る。

ユリウス暦一一八九年三月十六日に彗星が出現しているという報告を受けて、源頼朝(二品)自身が夜中に寝所から庭に出て、彗星を眺めたという記述です。

◇『お湯殿上の日記』(1) 天正八年九月二十九日条

この月一日のはうきほしのせんもんひさなかよりまいりて

天正八年九月二十九日は、ユリウス暦一五八〇年一〇月九日にあたります。『日記』には、この日に見えた「はうきほし」＝彗星に関する

る「せんもん」は古文が、陰陽家の土御門久脩ひさながより届いたとあります。この彗星については、中国、ヨーロッパでも多くの人に観られたという記述が残っています。

今回のワークショップでは、新たなオーロラ発見の可能性がある記述を見つけたことができました。イベントの最後に、この史料が歴史的オーロラ候補と判断できる根拠について、科学的な考察を行いました。これがその記述です。

◇『吾妻鏡』 文治五年三月三十日条

壬申 霽はれる。白気天に経り、北斗魁星を貫く。長五丈餘

ユリウス暦で一一八九年四月一七日に白い雲のようなものが空にかかり長さは五〇度ほどあった、という記述です。古典籍の中には、白く見えたオーロラのことを「白気」と記述する事例がいくつも見られます。『吾妻鏡』には、新月の頃の夜に長さ五〇度という長大な「白気」が、北斗七星の杓ますの部分を買かいていたという記述があり、オーロラの可能性があると判断しました。先行研究では、このときの「白気」は、オーロラではなく、彗星として理解されています。しかし、彗星であれば前後に同様の記述があると考えられますが、そのような記述もないので、これがオーロラか彗星か、あるいは他の現象かを特定するのは、今後の課題といえます。

今回集まった調査カードを精査してみると、彗星として分類されている現象の中には、肉眼で見えている現象にもかかわらず一日だけしか見えていないもの、また、その形態がオーロラとよく似たものもあり、これらについては、オーロラであった可能性のさらなる検討が必要なのかもしれません。

今回の試みを通して、私たちは、市民参加型研究がウェブ上だけではないことを再認識し、市民参加によってこれまで知られていなかった「知」の発見が可能となることを実証できたのではないのでしょうか。今後も、これまでにない研究が、国文研と極地研との共同研究によって可能になっていくことが期待されます。

参加者は、高校生から高齢の方まで幅広く、古典・歴史・天文好きの皆さんが一堂に会したイベントになりました。今回のようなグループ作業は、相補的な人材の活躍の場であり、ウェブ上とは全く違った人の輪の広がりがありました。高校生からは「もっと漢字が読めたら、できるんだけど」という声も聞こえ、学校教育における古文・漢文の重要性や、文理融合の新たな教育の方向性も見えてきたように思います。今回のワークショップを通して見えてきた新たな挑戦の芽を育て、新しい市民参加型研究、文理融合の在り方について、実践を通して考えていきたい

(1)『お湯殿上の日記』は、御所に仕える女官達により書き継がれた当番制の日記

(2)「長さ五〇度」は、二点間の距離を角度で表したものを。地平線から天頂までを九〇度。一丈は一〇度に相当。ちなみに、織女星と牽牛星間が約三〇度



ワークショップの様子

今後の事業推進に期待すること

日本語歴史的典籍ネットワーク委員会 評価小委員会委員長
(日本電子出版協会顧問)

なかやま
中山 正樹
まさき

本事業の評価については、十か年計画の三年目においても予算規模が大きく抑えられている状況で、様々な工夫を行い、進捗させていることを高く評価できます。

当初計画通りの予算措置をされる見通しがかかり厳しい状況であることを考えると、「歴史的典籍に関する我が国で最大唯一のデータベースを作成し、更に国際共同研究ネットワークを構築する」という事業の目的を再認識し、この目標を達成するために、本事業予算での個別の工夫に留まらず、国全体のデジタルアーカイブ関連の施策と同期し、ネットワーク社会でのデジタルトランスフォーメーションの進展に対応した適切な連携を図ることが必要ではないでしょうか。

国際共同研究ネットワークの構築により日本語歴史的典籍を活用した研究を推進するためには、網羅性の高いデータベ

ースが必須で、本事業予算でデジタル化しデータベース化できるものだけでなく、国立国会図書館をはじめ、公共図書館、個人等が個別にデジタル化し提供している歴史的典籍も併せて、活用できるデータベースを構築することが重要です。それぞれの機関が提供しているデータベースを一か所に集めなくても一つのデータベースとして活用できるようにした分散データベース環境を「日本語歴史的典籍データベース」とすることを想定します。

分散データベース環境では、個別の機関が独自のメタデータ仕様、デジタル化仕様、コンテンツ交換仕様、検索・閲覧機能を適用していた場合、連携が非効率的であり、データベースを構築する機関全体で国際標準、業界標準を適用していくことが重要です。また、「国際的な視点の中でのデータベース化」を目指すならば、オープン

データ化し、専門家によるクラウドソーシングによるタグ付けや、古典籍に関心のある国内外の一般層の様々なニーズに対応したサービスがアイデアソン、ハッカソン等で生み出されることを期待します。

本事業の計画期間終了の十年後を見据えると、国全体の施策として、「知的財産政策ビジョン」(二〇一三年)で示された今後十年の取り組みを参考に、「知的財産計画二〇一六」で示された分野ごとのアグリゲータ機関が連携した統合ポータルを、本事業の連携先の一つとし、我が国で最大唯一の日本語歴史的典籍データベースを構築していくことが、効率的・効果的と考えます。

今後、更なる努力により、実績を積み上げ、計画に対する内外の評価を高め、当初目的の達成に向けて進展していくことを期待しています。

コラム 夢応の料理

鯉魚と化した僧興義は釣り上げられ、平の助の館で鱠にされようとした(上田秋成『雨月物語』「夢応の鯉魚」)。「鯉ばかりこそ御前にも切らるる物なればやんごとなき魚なり」と『徒然草』一八段にあるように、鯉はかつて魚介類の中でも格付け上位の魚。その鯉魚を「鱠手なるものまづ我両眼を左手の指にてつよくとらへ。右手に研すませし刀をとりて俎盤にのぼし既に切べかりしとき」、興義は息を吹き返した。そして、館の人々も呼び寄せ奇妙な話を語りきかせる。結果、残れる「鮮き鱠」は「湖に捨させ」という。この場面は次のように挿絵に描かれたが、文章との違いに注目いただきたい【図版1】。大俎板の前に座し、鯉魚には直接手を触れることなく、右手に庖丁、左手に箸を持ち、今まさに切り分けられようとしている。周りの人々の視線を一身に集めており、鱠をつくるにしているはなんとも仰々しい限りではないか。

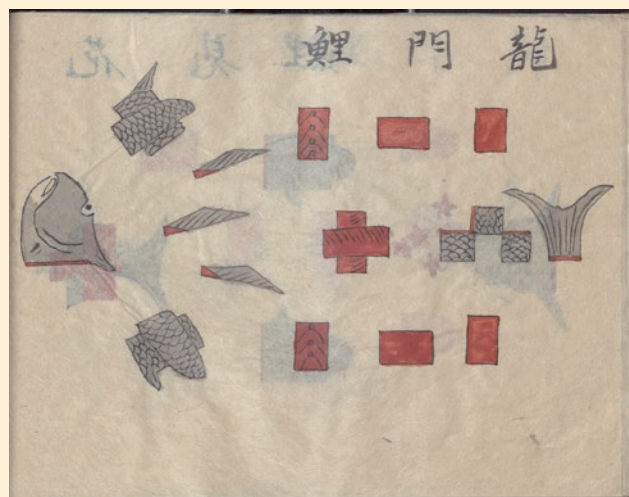
おそらく画師の描いたのは、いわゆる「庖丁式(式庖丁)」の類であった。四条流諸派のいずれかに属し、大名や貴族に召し抱えられた庖丁家により、食材を瑞祥表現(おめでたい型)に切り分け並べるパフォーマンスが庖丁式で、正式には烏帽子に垂直又は狩衣を身に纏っていたとされる。仮に文と絵の齟齬を認めたとして、では庖丁式での鯉魚は一体どうなったのか。その一つ



図版1 『雨月物語』(当館蔵)

の回答が今回紹介する『生間流直伝魚切方伝書』にある【図版2】。

庖丁式を執り行う流派の一つが生間流。各流派ごとに、儀式の内容は、一子相伝か派内の一部で受け継がれる秘伝・秘事として取り扱われてきたという。図を見ると、切り分けた頭と身が綺麗に俎板の上に並べられている。魚類などを切り分ける事を「切汰」とし、並べ終わった図を切汰図と言う。儀式にあった切汰図には式題があり、この図は祝いの席に相応しい「龍門の鯉」と



図版2 『生間流直伝魚切方伝書』

いう式題が付されている。ただ「夢応の鯉魚」の場合、決定的に式庖丁の儀式と異なる点がある。それは躍動感ある鯉の姿だった。通常は鯉は動かない。庖丁式は、生き物の死骸を食べ物へと昇華させる聖なる儀式でもあったのだ。

こうした秘伝書を含め、多くの食文化に関する文献、古典籍や錦絵などを所蔵されているのが、味の素食の文化センター(東京都港区)である。当館との連携により、今後、内製化による古典籍画像撮影および公開に向けての準備を進めていく。食文化に関する情報発信にご期待いただきたい。

シンポジウム開催

◆第二回 日本語の歴史的典籍国際研究集会

「日本古典籍への挑戦 ～知の創造に向けて～」

〔日時〕平成二十八(二〇一六)年

七月二十九日(金)十三時〇〇分～十六時四五分

七月三十日(土) 十時〇〇分～十七時〇〇分

〔会場〕国文学研究資料館 大会議室

(東京都立川市緑町十一三)

〔主催〕人間文化研究機構国文学研究資料館

<http://www.nijiac.jp/pages/cijproject/>

sympo20160729.html

知の創造に向けて
日本古典籍への挑戦

Tackling Pre-modern Japanese Texts:
New Horizons of Understanding

日時:平成28(2016)年7月29日(金)～7月30日(土)
場所:国文学研究資料館 大会議室(東京都立川市緑町10-3)
主催:大学共同利用共同研究法人人間文化研究機構国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature, National Institute for the Humanities

入場無料 聴講自由

7月29日(金) 総合開会 小林健二(KOBEYASHI Kenji) (国文学研究資料館)
13:00 聯合の舞臺 今西新一(MANISHI Yuchio) (国文学研究資料館)
13:05 機構挨拶 平川康(HIRAKAWA Mirami) (人間文化研究機構理事)
13:10 開会式 石川博一(IKAWA Kenichi) (国文学研究資料館)

13:20-14:00 特別講演 画像資料のあり方も手もかりにー
『Visual Studies』(2015/2017) (2014, 2015)の経緯と今後の展開
講師:ANG KIBIN (シンガポール大学教授)

14:20-14:30 休憩 (10分間)

14:30-14:40 『書誌学から見た研究について』
『書誌学』(2015/2017) (2014, 2015)の経緯と今後の展開
講師:石川博一(IKAWA Kenichi) (国文学研究資料館)

14:40-15:10 研究報告
『オニビと古書』
『The Onibi and Old Books』
石川博一(IKAWA Kenichi) (国文学研究資料館)

15:10-15:20 休憩 (10分間)

15:20-16:00 研究報告2
『書誌学から見た研究について』
『書誌学』(2015/2017) (2014, 2015)の経緯と今後の展開
講師:石川博一(IKAWA Kenichi) (国文学研究資料館)

16:00-16:45 研究報告3
『人本一ノミの表記情報』
『A Study of the Notation Information on the "Nippon" Series』
藤本打月(JIMOTO Akari) (国立国語研究所)
高田真由(MAKADA Mayu) (国立国語研究所)

17:30-19:00 センター
大学共同利用共同研究法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
新101号室
東京都立川市緑町10-3
TEL:042-526-8883
FAX:042-526-8883
E-MAIL:info@nijiac.jp
http://www.nijiac.jp

成果発信

平成二十八(二〇一六)年三月三十日にシエラトン・シアトル(米国)で開催された東亜図書館協会(CEAL)の年次大会において、日本資料委員会(CJM)と、北米日本研究資料調整協議会(NCC)とのジョイントセッション「Updates from Japanese Partners: the National Institute of Japanese Literature and the National Diet Library」に副センター長山本和明が登壇し、「Future of the Network for Research on Japanese Classical Books」と題し、当館が推進する大型プロジェクトの紹介を行いました。

翌三月三十一日に同会場にて開催された、アジア学会(AAS)年次大会の連携ミーティングEMJNで、当館准教授海野圭介が国際共同研究の成果発表の一環として、「The Place of Manuscripts in an Age of Mass Publication」と題し発表を行いました。



EMJNの様子

ふみ 第7号は、平成29(2017)年1月発行予定です。

■表題の背景色は承和色(そがいろ)です。平安時代の承和(じょうわ)年間(西暦八三四～八四七年)仁明天皇が大変好まれた黄色い菊を宮中の随所に植え、衣装も黄色にしたと伝わっています。「そが」は「じょうわ」から転じた読み方です。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター 第6号

〈発行日〉平成28(2016)年6月30日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijiac.jp/pages/cijproject/>



当館所蔵の「大職冠」がご覧になれます。携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。